

## イ 言葉かけにおける配慮

上記の工夫のなかでも、配慮ある言葉かけは、学級担任または教科担任として、まず最初に取り組めることであるばかりでなく、どんななかかわりにおいても、児童生徒に接する教師の誰もが実践しなければならない基本的なことでもあります。

この段階では「LDか否か」を確認できなくても、LDかもしれないことを踏まえて、通常の指導方法や単なる叱咤激励では効果が期待しにくいその特徴に留意すれば、言葉かけには下記のような工夫例が考えられます。

具体的で明確な指示や説明  
 個別の児童生徒への指示や説明  
 指示された行動内容の再言語化をうながす  
 児童生徒の反応については否定的表現を避ける

具体例の一部を紹介すると次ページ表4のようになります。どの例も、学習に向かう力をはぐくむために、いわゆる自己有能感を損なわない配慮が含まれています。

これらは、いずれも個別的対応を主とする場である障害児学級または通級指導教室での研究の中で、実践的に検証されたものなので、一斉指導が主になる通常の学級では実践しにくい言葉かけも少なくありません。けれども、通常の学級においても、指導の流れの中で留意すれば、活用できるものもあります。

表4 自己有能感を損なわず、意欲を引き出しやすい言葉かけ

は、通常の学級で活用できる場合が多いと考えられるもの

は、通常の学級で活用できる場合がかなりあると考えられるもの

は、通常の学級で活用できる場合が少ないと考えられるもの

工夫が必要な言葉かけの例	意欲を引き出しやすい言葉かけの例	相違点	活用できる程度
あと少し、がんばれ。	赤い線のあるところまで、3回できたら終わりだね。	具体的目標	
だいたいまとめなさい。	この欄に5行で書きなさい。	具体的指示	
できるところまでやりなさい。	この赤鉛筆のところまでだね。できたら先生に教えて。	具体的指示	
ちょっと待ってね。	この椅子に座って待つんだよ、手を打って20数えよう。	明確な指示	
しっかりやりなさい。	友達の跳び方は、ここに立って手は三角形の形を作って跳んでるね。	具体的例示	
落ち着きなさい。	椅子に座ろう、新しい紙をあげるよ。	具体的指示	
早くしなさい。	時間はいっぱいあってあるから計算し	安心感をも	

<p>どうしてみんなと同じにできないの。 静かにしなさい。</p> <p>うるさいから黙ってやりなさい。 だめ、何回言ったら分かるの。 時間割が変わります。これから体育をしますよ。</p> <p>取ってきた？</p> <p>分かった人は手を挙げなさい。 問題をよく見てごらん。</p>	<p>ていいよ。 君工夫してるね、鐘がなるまでこの問題までやってみよう。 先生、小さな声で話すから、君も口を閉じて話を聞こう。 そう、問題は声に出して確かめた方が分かりやすいね。 いいよ、あと3枚だけあげよう。</p> <p>2時間目は先生がいなくなるので国語ではなく、体育です。朝礼台の前集まりなさい。 取ってきてくれてありがとう、先生ともうれしいよ。 君に聞くよ、アとイのうちどちらが正しいですか。 問題のこの部分を読んでごらん。</p>	<p>たせる 肯定的表現</p> <p>肯定的表現</p> <p>解決行動の言語化 条件付き肯定 見通しをもたせる</p> <p>明確な感情表現 個別発問</p> <p>理解の視点への気づきをうながす</p>
--	---	--

援助は、自己有能感を損なわない配慮をもとにして、「弱点」を補うために、教材を用意したり、言葉かけに留意したりするわけですが、その児童生徒の「弱み」（＝学習困難）ばかりを探る発想からは、「つつい叱ってしまう」ことにもつながり、学習に向かう力を引き出したり、伸ばしたりできなくなってしまいます。つまり「学習のしにくさに特異性がある」ことを「学習の仕方に個性がある」と言えるほどの、いわば“ゆとり”をもった見方が必要です。否定的な情報ばかりではなく、能力を発揮した場面や得意なことなど、エピソードや行動に関する児童生徒の肯定的情報を持たない限り、個別的で具体的な指示を与えたり、意欲を高める評価をしたりすることはできません。

もちろん、状態像を「個性」として受け止めることは、誤りを見逃したり欲求をすべて受け入れて甘やかしたりすることではありません。また、不必要に褒めすぎたり、高く評価しすぎることも慎まなければならないし、事実に基づいて評価することも大切です。

各事例でも、このような留意事項に基づく援助が行われています。通級指導教室担当者の実践がほとんどですが、普段の授業での一斉指導やかかわりにおいて、通常の学級の担任にも可能な留意事項があります。表5にその例をまとめました。

表5 事例におけるLDの特徴に基づく留意事項

は、通常の学級での個別的配慮にかなり活用できるもの

は、場合によっては、通常の学級での個別的配慮に活用できるもの

事例	留意事項	活用できる程度
1	<p>教科学習の導入では、本児が得意な数や文字を使うことや本読みを手がかりとして活用する。</p> <p>学級担任が余裕をもってかかわることを意識し、ゆっくり説明する。</p> <p>活動と休息の違いをはっきりさせ、けじめをつけやすくする。</p>	
2	<p>感覚への働きかけについては、本児において優位な視覚を活用しつつ聴覚も平行して刺激し相互補完を図る。</p>	
3	<p>視覚刺激への反応がよいので、具体物をできるだけ利用する。</p> <p>本児が楽しめる学習内容を選ばせる。</p>	
4	<p>特に気になること以外は、話す途中で聞き返したり注意したりせず、話したいように話させ、表現させることで情緒の安定を図る。</p>	
5	<p>本児が得意なことやできたことを評価し、自信や意欲をもたせる。</p> <p>算数や体育で、拒否や抵抗のある場合は無理をしない。</p>	
6	<p>とりだし指導への“ためらい”や自尊心を配慮する。</p> <p>記憶の弱さを補うために、問題を解く途中で、小刻みに区切って計算の仕方や考え方をメモさせ、できるだけ図や具体物で示す。あわせて、解答できた(=成就)経験を増やす。</p>	
7	<p>ロールプレイで、得意なアナウンサー役をさせる。</p>	